

氏 名(本 籍) <sup>うえ</sup> <sup>きた</sup> <sup>やす</sup> <sup>ふみ</sup>  
上 北 恭 史 (奈 良 県)  
学 位 の 種 類 博 士 (デザイン学)  
学 位 記 番 号 博 乙 第 1,292 号  
学位授与年月日 平成 9 年 3 月 24 日  
学位授与の要件 学位規則第 4 条第 2 項該当  
審 査 研 究 科 芸 術 学 研 究 科  
学 位 論 文 題 目 中国の住宅における空間構成原理の持続と変容  
一集団住宅の住まい方を通して一

主 査	筑波大学教授	工学博士	土 肥 博 至
副 査	筑波大学教授	工学博士	富 江 伸 治
副 査	筑波大学教授	博士 (デザイン学)	原 田 昭
副 査	建築研究所室長	工学博士	小 林 秀 樹

## 論 文 の 内 容 の 要 旨

中国における住宅の供給形態は、第二次大戦後の、共産党による社会主義社会の実現によって、それまでの方式とは全く異なるものとなった。とくに、都市部においては個人による建設は認められず、すべて国家による統制的、計画的供給に委ねられ、建築形式は集合住宅に限られた。その結果、当然のことながら、住宅の平面計画や設備水準は、供給者側の考え方や経済的条件に大きく左右され、居住者の選択の余地は小さく、その要求が住宅に取り入れられる可能性もほとんど期待できない状態であった。

こうした経緯から、また長く続いた国家財政の窮迫のためもあって、建設される集合住宅の面積規模は狭小で、最低限の生活条件を満たすのがやっとという状況から、中国の現代住宅は計画研究の対象とはされてこなかった。中国の住宅研究といえば、四合院を代表とする伝統的住宅を対象とするものが大部分だったのである。しかし、80年代に入ってから経済開放政策のもとでの生活水準の向上、商品化住宅の登場によって、状況は大きく変わりつつある。すなわち、居住者の選択の可能性が生まれ、供給者側も居住者のニーズを把握する必要が生じてきたのである。

本研究は、こうした時代的な意味の転換期を的確に捉え、現代の中国の集合住宅の平面構成やその使い方の中に、中国の伝統的住宅にみられた住空間の特徴とそこにおける生活の様相、すなわち使われ方における特色の一部が持続しているのではないかと、という点に着目し、一方で変容している側面と対比しつつ、これを明らかにすることを目的として行われた。

論文は 6 章から構成されており、最後に結語がある。各章における考察内容を要約すると以下の通りである。

第 1 章「研究の目的と方法」では、上記の目的を述べた後、目的に到達するための基本的な仮説として、次の 6 点を挙げている。

- 1) 中国の伝統住宅の平面構成は、「社会的公私の軸」と「家族的公私の軸」のふたつの軸をもち、公から私に至る空間の序列がみられる。
- 2) 上のふたつの軸の原理は、近代初頭の都市集合住宅の平面構成を経て、解放後の集合住宅においても、入口から公室へ、公室から私室へとつながる平面構成に持続している。
- 3) 上の原理は、80年代以降の現代住宅にも、公私の序列というかたちで公私空間の平面構成に反映されている。
- 4) 居住者の住意識の違い（伝統的か近代的か）が、公私生活それぞれの利用空間の選択に影響している。

5) 解放後の集合住宅では、食事空間が次第に固定化されていく。

6) 伝統住宅でみられた套間という平面構成上の特徴は、現代の集合住宅における公私空間の連続というかたちで持続している。

次に用語の定義を行い、先行研究についてレビューしてこの研究の位置づけを明確にし、最後に研究方法として日本で蓄積された計画研究の方法、すなわち使われ方研究の方法を用いることを述べている。

第2章「中国住宅の平面構成の原理」において著者は、以降の住宅平面の分析の基準となる平面モデルの抽出を行っている。すなわち、四合院を典型例とする漢民族の伝統住宅における、門から堂に至る縦の軸と正房内部の堂と寝室、そしてしょう房に続く横の軸のふたつの軸によって構成されるモデルである。ついで、19世紀に列国の中国進出によって出現した租界に建設された都市型集合住宅である里弄住宅の平面にも、このモデルの原理が読みとれることを示した。さらにこのモデルは、解放直後の初期の社会主義集合住宅の平面計画にも受け継がれている様子を示し、環境の激変の中にあっても、長期にわたって形成されてきた伝統的空間構成の原理は、容易には失われないものであることを論じている。

第3章「中国都市住宅の建設概要と住空間の変化」では、解放後の中国の集合住宅の建設の背景と造られてきた住宅について解説している。また、収集した集合住宅の資料を定量的に分析し、住空間の変容の時系列的特徴を考察した。社会主義社会の実現のために建設された集合住宅は、政策による計画的側面を住宅の形態に表していることを指摘し、住空間の発展に実質的なコントロールが行われてきた背景を述べている。こうした経緯から、時代が進むにつれモデルの変容は大きくなり、伝統は断絶したように見えるが、入口と居室の間に新たに形成された「小庁」が公室的な空間であること、室の接続に套間の間取りが見られることなどから、著者は、大きな変容の中にも伝統の持続を見ている。

第4章「現代の集合住宅の公私空間における持続と変容」は、本論文の中心を成す章である。ここで著者は、現代の集合住宅における空間の利用実態と居住者の住意識を把握するために、北京、上海、広州の3都市において、独自の住まい方調査を行った。1節は調査概要と、収集した81事例の概要である。2節では、事例住宅の平面構成の分析を行い、公室をもたない11例を除く70例について、入口と公室の関係（開放か閉鎖か）と公室と私室の関係（接続か分離か）の2点に着目して、「A. 公室開放—私室接続」「B. 公室閉鎖—私室接続」「C. 公室開放—私室分離」「D. 公室閉鎖—私室分離」の4つの形式に分類した。平面構成だけから見れば、A. が最もよく伝統的原理を持続しており、D. が最も大きく変容しているタイプと見なすことができる。つづいて生活行為とその利用空間の関係を、公的性格の強いものから私的性格の強いものへ「接客一般」「親友の接客」「私的個人活動」「睡眠」の4行為について分析した。結果は、全体の半数近くを占めるA. タイプのみが、前2者を公室で後2者を私室で安定して行っており、他の3タイプでは安定した空間利用が見られないことを明らかにした。3節では、居住者の住意識と公私の生活に対応する空間利用との関係について考察している。住意識を捉える指標に制約はあるが、少なくとも、伝統的住意識を持っている居住者の場合には、私的性格を全く持たない「接客一般」を公室で行うほかは、ほとんど私室を利用していることを示し、住意識の違いが公私空間の利用形態に影響を及ぼしている可能性を示唆している。4節で住まい方調査の結果の考察に基づいた、伝統の持続と変容に関する知見をまとめた後、5節に、住まい方の典型的と思われる12の事例を詳細に報告している。

第5章「住空間における食事空間と套間の持続と変容」は、主題について全体的に論じた前章を補足し、考察を深めるために、特定の空間要素に絞って、持続と変容の姿を捉えようとするものである。まず前半の1, 2節では、変容の顕著な側面を表す要素として、食事空間を取り上げ、伝統住宅から現代集合住宅まで、食事の行われる場所の推移を検討した。本来中国の住宅においては、食事のための固定した空間は存在せず、その他の条件に対応して流動的であったが、解放後の部屋数の減少、夫婦共働きの一般化、生活時間の近代化などの要因によって、徐々に固定されていく過程を明らかにすると共に、そうした状況の変化が、狭小住宅の中に最初の公的空間である「小庁」を成立させる原動力になった経緯が明らかにされている。3節では逆に、持続の明らかな例証と

して套間について論じている。

第6章「中国の住宅における空間構成原理の持続と変容」は、本論文のまとめの章である。前章までの各章における考察結果を踏まえながら、近代化の中で生活様式が変化してゆく過程と空間構成原理とを関連させて、その持続と変容の問題を総括している。最後に、伝統住宅の屋内と戸外の間領域として機能していた中庭（天井）と生活行動との関係を考察し、今後の集合住宅の計画における住戸入口前の空間の扱い方の重要性について指摘し、控えめながら計画論を述べている。

## 審 査 の 結 果 の 要 旨

中国の住宅を思い浮かべるとき、あの格式高くバランスのとれた四合院と、都市の内外にわたって乱立している中高層の集合住宅との間には、その姿だけでなく住戸の間取りについても大きな隔たりがあり、通常両者の間に何らかの関連を感じることはない。むしろ、社会主義社会を建設していく過程で、伝統的な要素は半ば強制的に否定されてきた経緯もある。事実、この両者の関連に着目した研究者は、日本は無論のこと、中国人研究者にも見あたらない。中国の現代住宅の研究は、その居住水準の向上、居住環境の改善にもっぱら向けられてきた。

本研究の第1に評価される点は、この誰も目を向けなかった課題に取り組もうとした着眼点にある。結果的には、必ずしも明確なたちでこの仮説を検証したと言い切るには至っていないというものの、少なくとも、中国固有の空間構成原理が現代住宅の平面構成とその空間利用に持続している可能性の提示には成功している。第2点は、多くの制約がある中で、事例数は少ないものの、住まい方調査を行ったことである。それによって、生活行為と空間利用の関係をかなり明らかにすることができた。個人研究の範囲内でこれだけの住まい方事例を収集したのは著者が最初であろう。第3点としては、調査結果の分析方法の適切な選択と考察に当たった幅広い知識の動員が挙げられる。本テーマのような、非常にデリケートな現象を捉えるために欠かせない能力であるとはいえ、高く評価できる。ただ、問題を大きく捉えながら、一方では微妙な測定を必要とする課題であるだけに、結果の解釈にはやや疑問の残る点も見られる。また、広大な中国であり、その住宅を論じるにも地方性の視点は欠かせない筈であり、この点は今後の課題として残されている。

以上の諸点から本論文は、独自性のある十分な研究の水準に達しており、環境計画の分野の研究の発展に貢献するところが大きいものと認められる。

よって、著者は博士（デザイン学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。